水の特別賞

命を守る水

川口市立上青木中学校　三年　村山　真央

私は、水道のじゃ口をひねれば水がいくらでも出る恵まれた国「日本」で育ちました。水質基準によって健康に影響を及ぼさないよう安心・安全で、水道からそのまま水を飲む事もできます。

しかし、私の祖母が住んでいたフィリピンでは違いました。水道をひねってでてきた水は安全でないのです。昔実際に行った時には水量が少なくシャワーもまともに浴びる事ができないので井戸のある所で水を汲んでシャワーも浴びていました。それにトイレも水量が少なく、トイレットペーパーを流すと詰まってしまうのです。私は日本と全然違う暮らしにとてもビックリしました。ですが、さらにビックリしました。なぜなら、これでも東南アジアの中で水道水供給システムが進んでいると言うのです。他の国では、水を手に入れられる場所を見つけ、そこから水をくんできたり、水が手に入りずらい場合に対策を考えるのは、ほとんどの場合が女性の仕事です。考えてみてください。１人の人間が生活するために最低限必要な水の量として、国連が提唱しているのは１日あたり５０リットル。これを家族４人分、女性１人が３０分かかる水源までくみに行っているとすると、１年間の内に２か月半をこの仕事に費やすことになります。それでやっと水を手に入れられても不衛生な水であったらどうしますか？毎年２８万９０００人の子供が不十分な衛生習慣に直接関係した下痢性疾患で、５歳の誕生日を迎える前に命を落としてしまいます。この状況が当たり前であってよいはずありません。決して見逃すことのできない重大な危機なのです。

この状況を救うためにユニセフは募金を行っています。募金ができなくても、ポイ捨てをしないことや、ゴミ拾いをすることなど、本当に小さなことかもしれません。ですが、今１人が何かをしないと人々が安全な水を飲めることがないかもしれません。そうならないためにも、私たちにできる事は何なのか、考えることが大切だと思います。

今、私の祖母の家は、その募金によって水道も完備され、安全な水を飲めるようになりました。私の家族は、年に１回、鉛筆やノートがなくて学校に行けない子供たちのために、洋服や鉛筆、レトルト食品、おもちゃ、お米など様々な物をきふしてきました。私たちがあたり前に持っていてあたり前に入手している物でも、プレゼントするとすごく喜んで大切に使ったり、皆で分け合ってくれます。そんな子供たちを目のあたりにしてすごく元気をもらいました。また悲しくなりました。私たちが学校に行って勉強している間に、世界の子供たちは、家に残って家事をしているのです。その事を想うと、とても胸が苦しくなりました。日本でも、物を大切にしてくれる人が増えたらいいなと思います。

国による水道水の違い、水が及ぼす人体への影響。水道水に対する意識の違いをみなさん１人１人で変えてみませんか。